

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	同志社大学	拠点番号	I 2 5
申請分野	社会科学		
拠点プログラム名称 (英訳名)	技術・企業・国際競争力の総合研究 Synthetic Research on Technology, Enterprise and Competitiveness		
研究分野及びキーワード	〈研究分野:経営学〉(知識創造)(MOT:技術経営)(企業組織)(人的資源)(国際競争力)		
専攻等名	総合政策科学研究科(総合政策科学専攻)、 研究開発推進機構(技術・企業・国際競争力研究センター)		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 中田 喜文 教授 他 23名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について> 持続可能な経済システムとそこに生きる人々のQOL (Quality of Life) の向上に繋がる、企業の技術経営戦略とその実行を促進する革新的経営手法、およびマクロなイノベーションシステム、すなわちTIM (Technology and Innovative Management) と言われる領域についての総合的研究を行う。具体的には、技術経営、企業組織、人的資源、科学技術政策、国際競争力、等の研究領域を設定して、社会科学分野と自然科学分野の双方から総合的接近を試みる新領域である。</p>
<p><本拠点の目的> 技術経営、それを促進する経営手法、さらにはこれら2領域を外的に規定する科学技術政策を含むナショナルイノベーションシステムをも対象とした包括的な研究を、文理双方の視点を総合することで新学問領域を創造する。また新領域における有能な研究者の育成を通じて、日本にとどまらない普遍性のある持続的経済・社会システムの構築と、そこに生きる人々のQOLの向上を目的とする。</p>
<p><計画：当初目的に対する進捗状況等> 当初計画では、研究体制面、研究面、教育面それぞれにおける平成15、16年度2カ年の目標を次の通り置いた。 1) 研究体制面では、技術・企業・国際競争力研究センター (ITEC) において、事務サポートスタッフ配置やデータベース構築等研究インフラを整備するとともに、ホームページ等を通じた拠点情報提供活動を開始すること。そして、公募を含め、フェロー(専任と客員)、特別研究員(PDとDC)の採用を完了することを目標とした。 2) 研究面では、10の個別研究プロジェクトを立ち上げ軌道に載せるとともに、研究成果を、国際共同発行を含めたりサーチペーパー(Working Paper)を出版することでタイムリーに社会還元していくことを目標とした。 3) 教育面では、後期課程院生をリサーチアシスタントに採用しOJTでの研究指導を進める他、学内外の博士後期課程院生を対象としたTIMオープンチュートリアルや国際PhDワークショップを開催するとともに、TIMに関する研究者・教育者の養成を行う大学院博士後期課程プログラムの設置準備を完了し、平成17年4月に開校させることを目標とした。 現段階で、研究体制面、研究面、教育面のいずれにおいても、当初計画通りの進捗をみている。</p>
<p><本拠点の特色> 第1は、文理横断性である。経済学、社会学、経営学、法学と理学、工学、医療看護学等の文理の学者が、「技術と人と社会」という、極めて今日的な文理横断的社会的課題を研究する。第2は、国際性である。ITECという多国籍研究者集団を核として、一大学の枠を超え、国際的に高い評価を受ける海外の研究機関と、研究・教育の両面における連携を制度化することで、世界的に例の無いTIMの総合研究教育集団が形成された。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> TIMが対象とする研究領域は、文理の境界上に位置し、文理の研究者の問題意識の違いや方法論の異質性のため、今日まで十分な学問的取り組みが行われておらず、学問的には未発達である。その意味で、TIMを研究対象とする、新たな学問領域の構築は学術的には極めて重要であり、今後の発展性は極めて高い。</p>
<p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> 1) TIM研究と教育を国際的に進める、希少な教育研究機関が国内に完成する。2) TIM領域で国際的に活躍できる若手研究者を継続的に輩出する。3) 将来のTIM研究発展の基礎となる、学問体系が完成する。</p>
<p><本拠点における学術的・社会的意義等> 科学技術は、今世紀「人間のための科学技術」への転換を始めたが、その変化を人類の幸福と地球環境との共存に導くための科学が求められている。TIMはそのための科学であり、その成果は日本の国際競争力の持続的な向上にとどまらず、人類の経済厚生を持続性の向上と地球環境との共存の実現に貢献できる。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と判断される。</p>
<p>(コメント) この研究は次の3点に特色がある。第1は文理横断型であること、第2は京都の企業集団に焦点を合わせていること、第3は国際的な研究体制を進めている点である。いずれの点においても、しっかりとした実績を積み上げており、研究の進行管理は優れている。総括リーダーの研究チームを編成していく能力は極めて高い。 国際的研究体制では、海外の著名な学者を同志社の常勤教員に迎え、その推進を図っている点は他大学に見られない特色がある。特に評価が高かったのは、京都の優れた企業群が何故に高い国際競争力を創りだしてきているかについて研究の焦点が絞られている点であった。「京都モデル」とでもいうべき企業経営の実像が次第に浮かび上がってきている。この研究が予定された成果を上げれば、COE研究の良き事例として取り上げられるであろう。小規模で動きが早い柔軟な研究体制についての評価が高かった。</p>